

風 向 計

「心配なく」と返した。こんな会話が成り立つのは相手による。

ある日、車の入りにくい山の集落で火事が発生した。取材中、生理痛が我慢できず、民家に駆け込み「30分ほど休ませてください」と名刺を渡した。迎えに来た先輩に背負われて山を下り、どうにか職場に戻る事ができた。

「困ったのはその後だ。」煙を吸い込んだのかと男性のデスクに問い詰められ、答えに窮した。後日、デスクの家族に事情を説明し、お伝えくださいと頼んだ記憶がある。

座布団1枚の想像力

私的な生理の話は今も神経を使うが、コロナ禍で「生理の貧困」を訴える声が上がっている。家計が厳しく生理用品も買えない。そんな切実な状況を指した言葉だ。

大分県で子ども食堂を運営する「すみれ学級」は通ってくる小4以上の少女全員に毎月で生理用ナプキンを配る。欧州で「生理の貧困」が社会問題になっているのを知った藤井富生理事長(73)が「日本も深刻なはず」と発案し、企業から無償提供を受けて2018年に始めた。失礼ながら男性でよく気付

神屋 由紀子

いたものだ。電話でそう告げると藤井さんは苦笑した。「いえ、小学生の頃、おぶくろにこっぴどく怒られた思い出があるからですよ」

同級生に家が貧しく、月に数日休む女の子がいた。家に風呂がなく、体臭がきついと藤井さんは感じていた。そのことを家で話すと、母親から「あんたがその子を守らなきゃ」と叱られたのだ。

それから母親は担任の先生に渡す座布団を言付けるようになった。藤井さんは高校生になって気付く。使い捨てナプキンが登場する前は生理の

(論説委員)